

〈新刊紹介〉

前川喜久雄監修，山崎誠編

『講座日本語コーパス 2 書き言葉コーパス——設計と構築——』

前川喜久雄監修，小磯花絵編

『講座日本語コーパス 3 話し言葉コーパス——設計と構築——』

前川喜久雄監修，田野村忠温編

『講座日本語コーパス 6 コーパスと日本語学』

国立国語研究所で行われている日本語コーパスのプロジェクトに基づき，日本語コーパスとは何か，その構築から研究での利用・活用までを概観し，日本語学，言語学での統計学的アプローチを解説するシリーズの3冊である。

第2巻「書き言葉コーパス」は，書き言葉コーパスの設計と構築について，「現代日本語書き言葉均衡コーパス」と「日本語歴史コーパス」とを例にして具体的に解説する。内容は，「第1章 コーパスの設計（山崎誠・前川喜久雄）」，「第2章 サンプリング（丸山岳彦・柏野和佳子）」，「第3章 文書構造の電子化（山口昌也）」ほかと，末尾に「付録形態素解析ツール（小木曾智信）」，索引がある。

第3巻「話し言葉コーパス」は，『日本語話し言葉コーパス』の成果とその後の拡張や問題となる点，研究での利用可能性などを整理した上で，今後の話し言葉コーパス研究に何が求められているかを解説・概観する。内容は，「第1章 話し言葉コーパスの設計（小磯花絵・前川喜久雄）」，「第2章 話し言葉の書き起こし（小磯花絵）」，「第3章 発話の単位（丸山岳彦）」ほかと，末尾に「付録A 音声分析ソフトウェア「Praat」（西川賢哉）」，「付録B 映像解析ソフトウェア「ELAN」（菊地浩平）」，索引がある。

第6巻「コーパスと日本語学」は，特定領域研究「日本語コーパス」における「コーパスを用いた日本語研究の精密化と新しい研究領域・手法の開発」と公募研究『『日本語コーパス』と意味フレームに基づく語彙・構文複合資源の構築』の研究期間中およびその後の研究成果に基づき，コーパスを用いた日本語研究に関わる重要なトピックのいくつかについて述べたものである。内容は，「第1章 コーパスを用いた日本語研究の特徴——語彙・文法を中心に——（石井正彦・杉本武）」，「第2章 現代日本語の通辞変化（服部匡）」ほかと，末尾に「付録A 日本語研究とインターネット（田野村忠温）」，「付録B スクリプト言語（田野村忠温）」，索引がある。

（2014年12月10日発行 朝倉書店刊 A5判横組み 164頁 3,000円＋税 ISBN 978-4-254-51602-9）

（2015年2月5日発行 朝倉書店刊 A5判横組み 200頁 3,400円＋税 ISBN 978-4-254-51603-6）

（2014年12月10日発行 朝倉書店刊 A5判横組み 184頁 3,400円＋税 ISBN 978-4-254-51606-7）

宮島達夫編

『万葉集巻別対照分類語彙表』

本書は、万葉集でどの単語が何回使われているかを巻別に示し、意味とともに対照する表としてまとめられたものである。表の構成は、宮島達夫・鈴木泰・石井久雄・安部清哉編『日本古典対象分類語彙表』（笠間書院刊、2014年）にしたがっている。

また、「集計表 数値をみることへのいざない」と題した計量的な語彙分析の入門書も収載し、「異なり語数・延べ語数・平均出現頻度」、「見出し語が出現する巻数」、「出現比率・出現順位、高頻度語、累積出現比率」、「語種、品詞」、「意味分類」、「類似度」などについて分析する。本文を Excel・PDF ファイルに収めた CD-ROM を付す。

(2015年1月30日発行 笠間書院刊 A5判横組み 256頁 9,500円+税 ISBN 978-4-305-70751-2)

山森良枝著

『パースペクティブ・シフトと混合話法』

「おまえがうるさく言うから、先方は怒って帰ってしまったよ」のようなカラ節におけるル形の使用、「昨日、部長に今日東京へ行けと言われた」のような文における話者の地の文と「部長」の元発話の交叉、「そんなことして、バカじゃないか」のような否定疑問文が持つ肯定の傾きといった現象を、パースペクティブの混在・シフトの現象として捉え、これらが「表層文に具現化されない現行の発話行為の話者の主観（話者のパースペクティブに基づいた情報）を新たに会話の背景に導入する」という一種の〈日本語固有の話法〉として捉えられることを主張する書。「第1章 序論」、「第2章 引用と引用符 『統語論的括弧』と『語用論的括弧』」、「第3章 『埋め込み節事象先行型活動動詞ル形+カラ節/ノデ節』の時制解釈」、「第4章 いわゆる非分析的否定疑問文の分析」、「第5章 『Vである』・『Vておく』構文の意味と事象構造」、「第6章 いわゆる〈詠嘆の「も」〉について」、「第7章 結論」からなる。ひつじ研究叢書言語編第123巻として刊行された。

(2015年2月16日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 192頁 5,500円+税 ISBN 978-4-89476-747-8)

武藤彩加著

『日本語の共感覚的比喩』

本書は、語感と比喩との関係性についての考察を目的とし、日本語をはじめとする様々な言語の語感を表す語（形容詞、動詞、オノマトペ）の実例から、様々な感覚間の意味転用のありさまをみていくものである。

なお、本書の内容は博士論文「日本語の「共感覚的比喩（表現）」に関する記述的研究」（名古屋大学大学院、2003年度）を基として加筆修正したもので、ひつじ書房より研究叢

書言語編第124巻として発刊された。また、2007年度～2010年度文部科学省研究補助金若手研究(B)「共感覚的比喩の一方方向性仮説に関する研究」(課題番号19720096)、2012年4月～2016年3月(予定)文部科学省研究補助金基盤研究(C)「複数の言語における味を表す表現に関する研究」(課題番号24520473)の研究結果の一部を第4章と第8章に加筆している。

内容は次のようである。「第1章 はじめに」,「第2章 従来の共感覚的比喩論と本書の課題」,「第3章 日本語の共感覚的比喩の一方方向性仮説に関する考察」,「第4章 4つの言語における共感覚的比喩」,「第5章 味覚を表す形容詞の意味分析」,「第6章 五感を表す動詞の意味分析」,「第7章 食に関するオノマトペの意味分析」,「第8章 スウェーデン語と韓国語における味を表す表現の類型化」,「第9章 感覚間の意味転用に関わる比喩の分析」,「第10章 おわりに」。末尾に、資料、参考文献、実例出典、あとがき、初出一覧、索引を付す。

(2015年2月16日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 448頁 8,500円+税 ISBN 978-4-89476-748-5)

中俣尚己著

『日本語並列表現の体系』

著者が2009年に大阪府立大学大学院に提出した学位論文「日本語並列表現の体系的記述」をもとにまとめられたもの。平成26年度日本学術振興会科学研究費助成事業(研究成果公開促進費)の助成を受け、ひつじ書房「シリーズ言語学と言語教育」第33巻として刊行された。

統語的素性である「網羅性」と「集合の形成動機」に着目し、心理実験やコーパス調査などの手法も取り込みながら、並列助詞・接続助詞・接続詞の3つのカテゴリーにまたがる日本語の並列表現33形式について包括的かつ体系的な記述をおこなっている。第1部「本研究の理論的前提」に続き、第2部から第4部では、並列助詞、接続助詞、接続詞のそれぞれのカテゴリーごとに、各並列表現の統語的・意味的・語用論的特性が記述されている。「第2部 並列助詞の体系的記述」では、「と、や、も、か、とか、やら、だの、だか、なり、に」および読点による並列を扱う。「第3部 並列を表す接続助詞の体系的記述」では、「ば、し、て、連用形、たり、とか、やら、だの、か、だか、なり、わ」を扱う。「第4部 並列を表す接続詞の体系的記述」では、「それから、そして、また、さらに、しかも、それに、そのうえ、φ、一方、次に、なお」、および「または、あるいは、もしくは、ないし、それとも」を扱う。「第5部 本研究の理論的総括」では、日本語並列表現全体の体系をまとめるとともに、本研究の理論的な貢献について述べられている。末尾に参考文献、あとがき、索引を付す。

(2015年2月16日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 452頁 7,200円+税 ISBN 978-4-89476-736-2)

鳴海伸一著

『日本語における漢語の変容の研究——副詞化を中心として——』

漢語は、日本語に定着する過程で何らかの日本の変容を被る場合がある。そうした、言語接触の一つとしての漢語受容と、漢語の日本の変容の問題を、「漢語の国語化」という観点から捉え直し、漢語が副詞化する事例を中心に、個別の語史を検討する。それをもとに、副詞化の段階的なプロセスを示し、さらに、副詞における時間的意味・程度の意味発生の過程の一端を明らかにしつつ、それらをいくつかの類型にまとめる。それによって、個別の語史を総合して、漢語の日本の変容や副詞の意味変化といった体系的な視点でまとめることの必要性を示す。

本書は、博士論文（東北大学大学院文学研究科、2011年）をもとに、その後の研究成果をあわせてまとめたものであり、ひつじ研究叢書言語編第125巻として刊行された。

内容は、5部15章からなる。「第一部 序論」は、「第一章 漢語の日本の変容の仕組み——問題の所在——」「第二章 漢語の研究史概観」。「第二部 国語化と時間的意味・空間的意味」は、「第三章 「次第」の意味変化と時間副詞化」「第四章 「次第」の接尾語用法における時間的意味の発生」「第五章 「一所」の意味変化と空間的意味の喪失」「第六章 「一所」の意味変化による「一緒」への表記の交代」「第七章 「一所懸命」の意味変化と「一生懸命」の出現」。「第三部 国語化と程度的意味」は、「第八章 「相当」の意味変化と程度副詞化」「第九章 「随分」の意味変化と程度的意味・評価的意味の発生」「第十章 「真実」とその類義語の意味変化と程度副詞化」「第十一章 「むげ」の意味変化と程度副詞化」。「第四部 漢語変容の過程と類型」は、「第十二章 漢語の受容と国語化」「第十三章 時間的意味発生の過程の類型」「第十四章 副詞における程度的意味発生の過程の類型」。「第五部 結論」は、「第十五章 本書のまとめと今後の課題」。巻末に参考文献、調査資料、既発表論文との関係、あとがき、索引を付す。

(2015年2月16日発行 ひつじ書房刊 A5判縦組み 368頁 6,500円+税 ISBN 978-4-89476-749-2)

志波彩子著

『現代日本語の受身構文タイプとテキストジャンル』

著者が2009年に東京外国語大学に提出した学位論文「現代日本語の受身文の体系——意味・構造的なタイプの記述から——」ほかをもとにまとめられたもの。和泉書院研究叢書第454巻として刊行された。「序」,「第1章 体系, 構造, 要素」,「第2章 有情主語有情行為者受身構文」,「第3章 有情主語非情行為者受身構文」,「第4章 非情主語一項受身構文」,「第5章 非情主語非情行為者受身構文」,「第6章 テキスト別 受身構文タイプの分布」,「第7章 結——今後の課題——」からなる。小説の会話文, 地の文, 新聞の報道文, 評論文という4種類のテキストコーパスから収集した受身文の構文タイプ

を、動詞の結合価と語彙的な意味に基づいてきめ細かくかつ網羅的に分類し、各受身構文タイプの意味・構造的な特徴とそれぞれの相互関係のあり方について考察をおこなっている。4種類のテキストにおける各受身構文タイプの使用状況も調査し、テキストの構造と受身構文タイプの関係について分析をおこなっている。

(2015年2月25日発行 和泉書院刊 A5判横組み 439頁 10,000円+税 ISBN 978-4-7576-0734-7)

近代語学会編

『近代語研究 第18集——古田東朔教授追悼論文集——』

本書は、これまで第11～17集の『近代語研究』の編集を行ってきた古田東朔氏の追悼号である。

「はしがき」, 「古田東朔教授略歴」, 「抄物における助詞「ばし」の構文論的考察 (山田潔)」, 「感動詞・応答詞と評価的な程度副詞との連続性について——大藏虎明本における「ナカナカ」の分析から—— (田和真紀子)」, 「『天草版平家物語』から『太平記拔書』へ 不干ハビアン、J・ロドリゲスそれぞれの葛藤と軌跡 (小林千草)」, 「易林本『節用集』版本研究覚書——匡郭考—— (佐藤貴裕)」, 「「売れぬ日はなし」——商いと俳言—— (岩下裕一)」, 「近松世話浄瑠璃を中心とした終助詞ワイノについて——驚流狂言保教本における終助詞ワイノ再考—— (米田達郎)」, 「江戸時代における白話小説の翻訳と可能表現——「雅」「俗」二つの漢字文化—— (齋藤文俊)」, 「山県大弐の悉曇学と国語音声観察 (肥爪周二)」, 「近世における「～まじりに～」 (中野伸彦)」, 「明和の洒落本における係助詞ハの変容——付・浮世風呂・浮世床との比較—— (小松寿雄)」, 「和漢混交文としての『雨月物語』の文章——二形対立の用語を中心とした一考察—— (坂詰力治)」, 「[報告]『身代開帳略縁起』の表記実態——福岡女子大学蔵本による—— (矢野準)」, 「式亭三馬「風流稽古三弦」について (土屋信一)」, 「春色梅児誉美の「腹を立つ」について (坂梨隆三)」, 「上一段「射る」の五段化状況 (鈴木丹士郎)」, 「『文明論之概略』草稿の考察」に関する研究ノート (進藤咲子)」, 「明治前半期の接頭辞「不」と「無」 (松井利彦)」, 「明治のリテラシー (今野真二)」, 「鉄道列車名の形成と変化 (鏡味明克)」, 「○歳児・一歳児用絵本に現れる植物・食べ物——名の由来と特徴—— (園田博文)」, 「近世語研究の学史的展開——戦前における「対立」の思想を中心に—— (村上謙)」, 「宮沢賢治の童話における程度副詞——程度の大きさを表す表現について—— (小島聡子)」, 「東京語の大正時代 (田中章夫)」, 「近代以降の謙讓表現における受影性配慮について——「お／ご～申す」「お／ご～する」「させていただく」—— (伊藤博美)」, 「バリ万博録音資料の分析——江戸・明治期を中心とした口語資料との比較から—— (長崎靖子)」, 「明治中期・後期の旧制中学教科書における学術用語——『哲学字彙』編者が執筆した専門書と教科書—— (真田治子)」, 「英文日本語文典の用語について——活用語・構文法に関する記述を中心に—— (大久保恵子)」, 「『改正増補英和対訳袖珍辞書』と異なる『英仏単語篇注解』の訳語について(1) (櫻井豪人)」, 「ニコライ・レザノフ『日本語理解の手引き』にあるキリル文字で表記された日本語の特徴について

(浅川哲也)、「条件表現を由来とする勧め表現の歴史——江戸・東京と上方・関西の対照から——(森勇大)」、「副詞「いっそ」の史的変遷(林禎映)」、「形容詞終止連体形の副詞的用法(増井典夫)」、「執筆者略歴」。

(2015年2月25日発行 武蔵野書院刊 A5判縦組み 672頁 18,000円+税 ISBN 978-4-8386-0280-3)

木村一著

『和英語林集成の研究』

本書は、19世紀の日本における宣教師らの日本語研究活動の実態と成果を捉えることを目的とし、『和英語林集成』の成立過程を研究するものである。

本書の内容は博士論文(立教大学大学院文学研究科、2012年度)を加筆修正したものであり、また、本書は独立行政法人日本学術振興会平成26年度科学研究費助成事業および東洋大学平成26年度井上円了記念研究助成(刊行助成)の交付を受けた。

内容は以下の通りである。

「序章 日本語研究資料としての『和英語林集成』」、「1章 「手稿」 刊行に向けて」、「2章 「手稿」から初版へ」、「3章 初版、再版そして3版へ」、「4章 『和英語林集成』の周辺資料」、「終章」に続く「付」には、「日本語序説」の異同一覧や改版における増補された見出し語、ローマ字分かち書きによる語の意識に関して述べられている。最後に、参考文献一覧、初出一覧、あとがき、索引(事項・語彙索引、書名索引、人名索引)を付す。

(2015年2月25日発行 明治書院刊 A5判横組み 532頁 13,000円+税 ISBN 978-4-625-43452-5)

瀬間正之著

『記紀の表記と文字表現』

本書は、1994～2013年までの著者の記紀関係の論をもとにまとめられたものである。古事記、日本書紀の文字表現の成立、古事記歌謡の表記と表現、古事記の神名表記を取り上げる。

なお、本書は2014年度上智大学個人研究成果発信奨励費の支給を受けたものである。内容は次の通りである。

「序に代えて 記紀に利用された典籍——出典論の研究史と展望——」、「第一篇 文字文化の基盤としての〈百済=倭〉漢字文化圏」には、「序章 古代半島・列島の文字文化」、「第一章 文字表現から見た「弥勒寺金製舍利奉安記」——典拠を中心に——」、「第二章 〈百済=倭〉漢字文化圏の観点から見た古事記難語試解」、「第三章 三輪山型神婚譚と須恵器」。「第二篇 記紀開闢神話生成論の背景」には「第一章 日本書記開闢神話生成論の背景」、「第二章 古事記序文開闢神話生成論の背景」。続いて、「第三篇 古事記の文字表現と成立」には、「第一章 記序は何故「進五経正義表」に依拠したのか」、「第二章

古事記「尔」再論」,「第三章 古事記の漢語助辞——「還」の副詞用法を中心に——」,「第四章 記載されない求婚譚——『古事記』雄略天皇のカラヒメ求婚譚の探索——」,「第五章 古事記は和銅五年に成ったか」で構成される。続く「第四篇 日本書紀の文字表現と漢籍仏典」は、「第一章 仁徳紀後半部の述作——仁徳紀五十八年条「連理」を手がかりに——」,「第二章 「未經」「既経」——師説「太安万侶日本書紀撰修参与説」をめぐって——」,「第三章 雄略紀と仏典語」,「第四章 孝徳紀詔勅の訓読的思惟」,「第五章 日本書紀の類書利用——雄略紀五年「葛城山の狐」を中心に——」で構成される。さらに「第五篇 記紀歌謡の表記と表現」は、「第一章 文字記載と歌謡」,「第二章 記載文学としての八千矛神歌謡」,「第三章 古事記に於ける歌謡詞章の更新」,「第四章 「下娉ひに」と「とひ(樋)」」,「第五章 記紀歌謡の原表記」。最後の「第六篇 神名の表記と解釈」は、「第一章 古事記神名へのアプローチ序説——神名表記の考察を中心に——」,「第二章 ヒルコの変容」,「第三章 古事記神名の語構成とその表記」。末尾に注、関連論文一覧、後記、総合索引を付す。

(2015年2月26日発行 おうふう刊 A5判縦組み 472頁 12,000円+税 ISBN 978-4-273-03762-8)

友定賢治編

『感動詞の言語学』

本書は日本語音声コミュニケーションにおける感動詞のはたらきについて、地域性を明らかにするとともに、認知科学的・社会的なアプローチを統合して、明らかにしようとするものである。

本書は、日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(B)「現代日本語感動詞の実証的・理論的基盤構築のための調査研究」,課題番号19320067)の研究成果の一部であり、ひつじ研究叢書言語編第102巻として発刊された。

内容は次のようである。

「Ⅰ 理論的研究」に、「感動詞と内部状態の結びつきの明確化に向けて(定延利之)」ほか。「Ⅱ 記述的研究」に、「予想外と想定外——感動詞「げっ」の分析を中心に——(富樫純一)」ほか。「Ⅲ 会話分析的研究」に、「WH質問への抵抗——感動詞「いや」の相互行為上の働き——(串田秀也/林誠)」ほか。「Ⅳ 地理的研究」には、「猫の呼び声の地理的研究——動物に対する感動詞——(小林隆)」。「Ⅴ 対照言語学的研究」に、「感動詞の多層性をめぐる考察——日独対照を例に——(パウル・チブルカ)」。「Ⅵ 調査法の開発」に、「感動詞類調査のための「ビデオ質問調査票」の開発について(有元光彦)」。末尾に語句索引を付す。

(2015年3月12日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 290頁 4,800円+税 ISBN 978-4-89476-612-9)

西尾純二著

『マイナスの待遇表現行動——対象を低く悪く扱う表現への規制と配慮——』

本書は、マイナス待遇表現行動のモデルを構築し、関西地方や愛知県岡崎市の調査結果のほか、全国の大学生を対象にした調査結果などに基づいて、マイナス待遇表現の世代差や性差、地域差、時代差などの多様性について、把握・検証することを試みたものである。

なお、本書の内容は博士論文（大阪大学大学院文学研究科研究科，2003年度）に加筆修正を加え、新たな書き下ろしを加えて刊行されたものである。

「第Ⅰ部 理論的背景」に、「第1章 研究の対象と考察の方針」，「第2章 待遇表現の言語行動論的研究史」，「第3章 マイナスの待遇表現行動と言語行動研究」，「第4章 マイナス待遇表現行動のモデル」。「第Ⅱ部 マイナス待遇表現の表現性と多様性」に、「第5章 関西方言の卑語形式「ヨル」の表現性」，「第6章 卑語形式選択における規範意識の属性差——卑語形式が選択されるプロセスの多様性——」，「第7章 マイナス待遇の契機への評価とその表出の世代差」，「第8章 発話レベルのマイナス待遇表現行動の分析(1)——相手との対人関係による変化——」，「第9章 発話レベルのマイナス待遇表現行動の分析(2)——補償的表現スタイル——」，「第10章 大学生におけるマイナス待遇表現行動の地域差——待遇表現行動の地域的変異——」，「第11章 マイナス待遇表現行動の契機に対する言語行動の変容——愛知県岡崎市の『敬語と敬語意識』に関する経年調査から——」。末尾に、索引を付す。

(2015年3月3日発行 くろしお出版刊 A5判横組み 288頁 3,700円+税 ISBN 978-4-87424-645-0)

永田高志著

『対称詞体系の歴史的研究』

本書は、日本語の対称詞の体系について、文献、新聞記事、アンケート調査を通して時代ごとの実態を明らかにしようとするものであり、人称代名詞と述部の待遇表現の呼応に重点が置かれていたこれまでの研究とは異なる面から対称詞を捉えようとするものである。

本書は近畿大学学内研究助成金制度（刊行助成）により、和泉書院研究叢書第455巻として刊行された。

「序 対称詞体系の歴史的研究」において対称詞の定義と研究史を概観したのち、「第1章 王朝文学の対称詞」，「第2章 軍記物語の対称詞」，「第3章 『捷解新語』の対称詞」，「第4章 近世武家の対称詞」，「第5章 明治前期東京語の対称詞——散切物を通じて——」，「第6章 『にぎりえ』『たけくらべ』に見る対人待遇表現」，「第7章 明治後期・大正期東京語の対称詞」，「第8章 総合雑誌『太陽』に見る対称詞」，「第9章 国定国

語教科書の対称詞」,「第10章 昭和前期の対称詞」,「第11章 昭和後期における二人称代名詞「あなた」の待遇価」,「第12章 平成の対称詞」では各時代を取り上げ,「第13章 方言の対称詞」では共通語と方言の対称詞体系の異なりについて,「第14章 世界の言語の中で見た日本語の対称詞」では日本語と類似した東アジアの一部の対称詞を取り上げ,「結語」をまとめる。末尾に参考文献と索引を付す。

(2015年3月5日発行 和泉書院刊 A5判横組み 288頁 7,000円+税 ISBN 978-4-7576-0735-4)

高田博行・渋谷勝己・家入葉子編著

『歴史社会言語学入門——社会から読み解くことばの移り変わり——』

シリーズ・言語学フロンティアの4冊目で,歴史言語学と社会言語学を統合させた「歴史社会言語学」について,近年,各時代の言語状況や言語変化を,言語と社会との相関の中で分析し,理解することの必要性が急速に意識されるようになったことを受けて編まれた。歴史社会言語学という研究分野を概観し,日本語・英語・ドイツ語における個別の研究をケーススタディとして描き出す。内容は以下の通りである。

「第1部序論」は,「第1章 歴史社会言語学の基礎知識(渋谷勝己・家入葉子・高田博行)」,「第2章 文献と言語変種——文献に残されたことばの多様性が意味するところ——(金水敏)」。「第2部 言語変種」は,「第3章 下からの言語史——19世紀ドイツの「庶民」のことばを中心にして——(シュテファン・エルスパス(訳 佐藤恵))」,「第4章 山東京伝の作品に見るスタイル切り替え——音便形・非音便形を事例に——(渋谷勝己)」。「第2部 言語接触」は,「第5章 中国語と日本語の接触がもたらしたもの——7~8世紀の事例に基づいて——(乾善彦)」,「第6章 15世紀の英語とフランス語の接触——キャクストンの翻訳を通して——(家入葉子・内田充美)」,「第7章 多言語接触の歴史社会言語学——小笠原諸島の場合——(ダニエル・ロング)」。「第4部 言語計画」は,「第8章 近代国民国家の形成と戦前の言語計画(山東功)」,「第9章 19世紀の学校教育におけるドイツ語文法——ドゥーデン文法(1935年)にまで受け継がれたもの——(高田博行)」,「第10章 英語における「言語計画」とは?——規範化に向かった時代(18~19世紀)——(池田真)」。末尾に,参照文献,事項索引,人名索引を付す。

(2015年3月10日発行 大修館書店刊 A5判横組み 256頁 2,300円+税 ISBN 978-4-469-21350-8)

小鹿原敏夫著

『ロドリゲス日本大文典の研究』

本書は,『日本大文典』を外国人宣教師ロドリゲスの視点から再構築しようと試み,欧州のラテン文法の枠組みを踏まえた上でロドリゲスの日本語分析法を見直そうというものである。

本書の内容は,博士論文(京都大学大学院文学部,2012年度『ロドリゲス日本大文典の研

究])を加筆修正したもので、京都大学文学部より2014年度優秀博士論文出版助成金を受け、和泉選書第176巻として発刊された。

「第一章 宣教師文典としての大文典」,「第二章 大文典における文法記述について」,「第三章 大文典における語根について」,「第四章 大文典における中性動詞について」,「第五章 大文典の「条件的接続法」から小文典の「条件法」へ」,「第六章 大文典における「同格構成」と「異格構成」について」,「第七章 大文典クロフォード家本について」,「付章 『コリヤード日本文典スペイン語草稿本』について」,「付 キリシタン資料について」,「初出について」,「参考文献」,「あとがき」,「英文梗概」。

(2015年3月20日発行 和泉書院刊 B6判横組み 256頁 3,000円+税 ISBN 978-4-7576-0733-0)

朝日祥之・原山浩介編

『アメリカ・ハワイ日系社会の歴史と言語文化』

本書は、言語学、歴史学、デジタルアーカイブス学、歴史社会学、博物館学などの多角的な視点から移民資料を読み解くことを試みた総合研究であり、人間文化研究機構「日本関連在外資料の調査研究」において、「南北アメリカの移民関係資料ならびに移民社会に関する研究」と「ハワイと北米に渡った日系移民音声資料を用いた社会言語学的研究」の2つのチームによる調査・研究の成果をまとめた論集である。

「序論 「日本語」から出発する移民史」,「第1章 19世紀末から終戦期にかけて活躍した Japanologist と日本語の役割」,「第2章 ハワイの日系／沖縄系社会にみられる日本語の特徴」,「第3章 労働者向け新聞『ハワイスター』の時代——太平洋戦争後のハワイにおける思想状況の断面——」,「第4章 オーラルヒストリーからみた戦後の活動史の再整理——ハワイ日系人抑留者の戦時強制収容体験——」,「第5章 A Steward by Hapenstance: 25 Years of Japanese American Public History and Collections 偶然が生み出した執事：日系アメリカ人をめぐるパブリックヒストリーとコレクションの25年」。続いて、「資料の現場から」と題され、「①「埋もれた声」のデジタルアーカイブ化」,「②雑誌『植民』植民間答 一移住希望者のQ & A」が収められている。末尾にあとがきと執筆者紹介を付す。

(2015年3月25日発行 東京堂出版刊 A5判横組み 292頁 6,500円+税 ISBN 978-4-490-20899-3)

富谷至編

『漢簡語彙考証』

本書は、著者が主宰してきた京都大学人文科学研究所の共同研究班の「漢簡語彙の研究」(2004～09年)と「漢簡語彙辞典の出版」(2010～14年)と題した研究の成果としてまとめられた『漢簡語彙 中国古代木簡辞典』(岩波書店刊)の姉妹編として発刊された

ものである。本書では、一般の漢和辞典に類する『漢簡語彙 中国古代木簡辞典』では網羅できなかった語彙確定の根拠と各語彙の歴史や変遷を補強する。

内容は、「Ⅰ 漢簡概説」「Ⅱ 事項考証」「Ⅲ 語彙考証」の3部から構成されている。「Ⅰ 漢簡概説」に、「一 木簡の発見」、「二 漢簡研究の軌跡」、「三 簡牘の形状と名称」、「四 辺境出土簡の時代」、「五 辺境行政と漢簡の内容」、「六 漢簡の文字と語彙」。「Ⅱ 事項考証」に、「一 エチナ川遺跡の最新情報」、「二 弓の部品の名称について」、「三 訴訟手続き」、「四 農官について」、「五 王莽時代の漢簡」、「六 漢代の時制」。以上の2つの部は、漢簡語彙解読に必要な基礎的事柄を知るものである。そのあとに、本書の中心をなす「Ⅲ 語彙考証」が続く。末尾に執筆者分担を付す。

(2015年3月25日発行 岩波書店刊 A5判縦組み 488頁 9,500円+税 ISBN 978-4-00-061026-1)

京都大学人文科学研究所簡牘研究班編
『漢簡語彙 中国古代木簡辞典』

本書は、前漢中期から後漢後期にわたる時代に中国西北地方で出土した5万点の漢簡の意味を解明し、約7000項目を収載した語彙の辞典である。語義ごとに典籍と漢簡の用例を併記し、見出し字の画像も掲げられている。

本書は、京都大学人文科学研究所の共同研究班の「漢簡語彙の研究」(2004～09年)と「漢簡語彙辞典の出版」(2010～14年)と題した研究の成果としてまとめられた。末尾に絵画索引を付す。

(2015年3月25日発行 岩波書店刊 A5判縦組み 611頁 22,000円+税 ISBN 978-4-00-080318-2)

京都大学文学研究科編
『日本語の起源と古代日本語』

本書は、これまでの起源論を整理した上で新たな起源論を探ることを目的とした、日本語の起源に関する最新の研究成果である。なお、本書は2012年12月9日に開催された、京都大学文学研究科・文学部公開講演会「日本語の起源と古代日本語」に基づいてまとめられた。

内容は次のようである。「序文(服部良久)」に続き、「第1章 日本語起源論の整理(木田章義)」では、日本語の起源論争を音韻対応や表記法の観点から整理し、なかでも朝鮮語と日本語の関係性について取り上げる。「第2章 私の日本語系統論——言語類型地理論から遺伝子系統地理論へ——(松本克己)」では祖語や語族という枠を超えた言語の親族関係を探る方法論を示す。この章については「松本克己先生の「私の日本語系統論」に対するコメント(吉田和彦)」を付す。続いて「第3章 古代日本語動詞の歴史的動向から推測される先史日本語(釘貫亨)」では、古代語形成期の様相について動詞増産と文法的単位の変質という側面からその特徴を明らかにする。「第4章 古代日本語のうつりか

わり——読むことと書くこと——（大槻信）」では日本語の書きことばの典型としての和漢混交文の成立をたどり、日本人はどのようにして文章を書くことを獲得したのかを漢文訓読に注目しながら論じる。

（2015年3月30日発行 臨川書店刊 A5判横組み 280頁 3,300円＋税 ISBN 978-4-653-04224-2）

国語語彙史研究会編

『国語語彙史の研究 34』

国語語彙史研究の体系化と共に、語彙史研究の新たな方法論や隣接分野との関わりにも積極的に取り組んだ論文集。特集は複合語と派生語。

内容は次の通りである。「複合語と派生語と（蜂矢真郷）」、「上代語動詞の形容詞転用に関する諸問題（釘貫亨）」、「副助詞の形——「だに」「さへ」「すら」の場合——（小柳智一）」、「形容詞被覆形・露出形による名詞複合用法（蜂矢真弓）」、「上代・中古のナフ型動詞（中垣徳子）」、「中古形容詞に見られる複合的方式についての一考察（村田菜穂子）」、「「そら＋形容詞」型の「そら」に関する一考察（山王丸有紀）」、「モノクサシの語史——嗅覚表現（くさい）から性向表現（ものぐさ）へ——（池上尚）」、「近世初期俳諧『紅梅千句』に見える「ふためく」について（田中巳榮子）」、「化政期～幕末期江戸語における危惧表現形式——滑稽本・人情本を資料として——（近藤明）」、「近代における助数詞「個」の用法（伊藤由貴）」、「漢語の連声濁について——歴史的視点に基づく分析——（山田昇平）」、以上が特集。「仮名の変遷について——北山抄から豊臣秀吉書状まで 付・築島裕博士の仮名史研究——（山内洋一郎）」、「索引とコーパスを利用した形容詞語彙の採取について（前川武・村田菜穂子）」、「中世後期から近世初頭における高程度を表す副詞の諸相——高程度を表す評価的な程度副詞を中心とした体系と主観化傾向——（田和真紀子）」、「キリシタン版対訳辞書群における聾啞関連語彙（末森明夫・新谷嘉浩）」、「『通俗三國志』巻一の漢語語彙と漢語（浅野敏彦）」、「和田維四郎訳『金石学』の金石名について（吉野政治）」、「〈見る行為〉の描写と文末テンス形式——二葉亭四迷翻訳作品における「見ると」「見れば」を含む文の保持と改変——（深澤愛）」、「「障害」の語史——言い換え語における漢語の中立性とその弱化——（郡山暢）」、「振仮名を語彙的事象としてとらえる（今野真二）」。

（2015年3月31日発行 和泉書院刊 A5判縦組み 404頁 11,000円＋税 ISBN 978-4-7576-0756-9）

西原一幸著

『字様の研究——唐代楷書字体規範の成立と展開——』

本書は、字形・字音の類似によって錯誤に至る可能性のある楷書を弁別するために撰述された典籍「字様」を取り上げた典籍範疇に関する著者の論文集であり、「基本篇」、「応用篇」、「解説篇」の三部構成をとる。まず、「基本篇」には字書、韻書、音義などの小学書と並ぶ新種の典籍といえる字様の発見過程と字体規範の考察を掲げる。次に「応

用篇』には、その結果をもとにどのような問題が解けるかが示される。最後に「解説篇」では字様研究の要点が記されている。

内容は次の通りである。「基本篇」には「第一章 『新撰字鏡』所引の『正名要録』」,「第二章 唐代楷書字書の成立——『顔氏字様』から『干祿字書』『五経文字』へ——」,「第三章 『顔氏字様』以前における楷書整理と『正名要録』の成書年代」,「第四章 独立の典籍範疇としての字様」,「第五章 敦煌出土『時要字様』残卷」,「第六章 敦煌出土『新商略古今字様撮其時要並引正俗釈』残卷」,「第七章 『干祿字書』と『五経文字』、その違いはどこからきたか」,「第八章 杜延業撰『群書新定字様』の佚文」,「第九章 敦煌出土『正名要録』記載の字体規範の体系」,「第十章 俗体とは何か——顔元孫と俗体の成立——」,「第十一章 顔氏一族と『干祿字書』、俗字の活用」,「第十二章 開成石経と唐玄度撰『九経字様』——石経字形は如何にして決められたか——」,「補説 顔師古撰『顔氏字様』に字体規範は存在したのか」。「応用篇」には、「第十三章 『新撰字鏡』本文中における『正名要録』の利用」,「第十四章 図書寮本『類聚名義抄』所引の『干祿字書』」,「第十五章 図書寮本『類聚名義抄』所引の「類云」とは何か」,「第十六章 『類音決』の佚文——図書寮本『類聚名義抄』所引の「類云」とは何か——(補遺)」,「第十七章 隋・唐代における字体規範と仲算撰『妙法蓮華経釋文』」,「第十八章 異体字同定上の問題点」,「第十九章 唐代楷書字体規範からみた『龍龕手鏡』」。「解説篇」には「第二十章 敦煌出土 S388 番写本概要」,「第二十一章 字様の研究史」,「第二十二章 唐代楷書字体研究に果たした敦煌出土スタイン 388 番写本の役割——『正名要録』と『群書新定字様』——」。末尾にあとがき、初出一覧、索引を付す。

(2015年3月31日発行 勉誠出版刊 A5判縦組み 496頁 9,800円+税 ISBN 978-4-585-28017-0)

中山緑朗編

『日本語史の研究と資料』

本書は、日本語の研究と資料をテーマにした 25 編の論考からなる論文集である。

内容は次の通りである(以下副題略)。「万葉集の「令」字(沖森卓也)」,「古代日韓漢字音と上古音(趙大夏)」,「『古今和歌集』の二つの謎(小池清治)」,「平安以降の文芸作品における感動詞「あな」と「あら」について(木下哲生)」,「親鸞の転写本と自著本の著述の方法(金子彰)」,「接続詞「さらば」の意味・用法に関する考察(坂詰力治)」,「「あきだる〈飽足〉」の史的展開(山本真吾)」,「『玉塵抄』の並列表現(山田潔)」,「南総里見八犬伝「首級」のルビをめぐって(坂梨隆三)」,「芭蕉「閑かさや岩にしみ入る蟬の声」の解釈をめぐって(川嶋秀之)」,「狂詩の漢字語(荒尾禎秀)」,「新たな試みを見せた辞書たち(倉島節尚)」,「昔話の待遇表現(阿部八郎)」,「グロットグラムにみる「斜めの等語線」について(都染直也)」,「〈翻刻〉明治初期の文法学説(中山緑朗)」,「『譯通類聚』の索引(木村一)」,「『辞典』とその類語小考(潘鈞)」,「九州西南部方言における順接仮

定条件表現体系の多様性（三井はるみ）, 「明治における接続詞「しかし」の用法について（梅林博人）, 「漢文系複合辞と対応する中国語文型の由来（朱京偉）, 「類を表す造語成分「姉妹」の成立と展開（木村義之）, 「幕末明治初期における近代法律用語の成立と伝播（孫建軍）, 「明治初期の洋書教科書と『哲学字彙』の術語（真田治子）, 「アーネスト・サトウ『会話篇』の日本語（飯田晴巳）, 「メドハースト『英和英語彙集』〈1830〉の底本について（陳力衛）。

（2015年3月31日発行 明治書院刊 A5判縦組み 448頁 13,000円+税 ISBN 978-4-625-43453-2）

阿部二郎・庵功雄・佐藤琢三編

『文法・談話研究と日本語教育の接点』

砂川有里子氏の筑波大学退職を記念して編まれた論文集。「文法」「談話」「日本語教育」をキーワードとする15編の論考からなる（以下副題略）。「補助動詞テオク（佐藤琢三）, 「『産出のための文法』に関する一考察（庵功雄）, 「従属節の共起について（長谷川守寿）, 「引用句内におけるコンピュータの非出現について（阿部二郎）, 「文末のムード形式とポライトネス（牧原功）, 「格助詞から接続詞への拡張について（天野みどり）, 「非文末『ですね』（富樫純一）, 「学生-教員間会話における話題提供者の『ね』の使用（生天目知美）, 「日本語の試食会におけるモダリティとエビデンシャリティの使い方（ポリー・ザトラウスキー）, 「論説的な文章・談話における文末表現の使われ方について（渡辺文生）, 「作文教育における文章論と日本語教育の接点（木戸光子）, 「日本語学習者の意見文に見られる列挙の文章構造の問題点（石黒圭）, 「文脈から見た文末表現と主題の持続（アンドレイ・ベケシュ）, 「談話終結部における文のタイプ（俵山雄司）, 「逆接の接続詞と談話構成力の習得（砂川有里子）。巻末に、対談「日本語の教育と研究の間（あわい）——来し方と行く末——」（砂川有里子・白川博之）を付す。

（2015年4月10日発行 くろしお出版刊 A5判横組み 360頁 4,200円+税 ISBN 978-4-87424-653-5）

小田勝著

『実例詳解古典文法総覧』

本書は、奈良時代から文明年間頃までの文学作品に用いられる文語文の文法を記述した古典文法の文法書である。本書の特徴として、品詞別の記述形式を廃し文法範疇別の形式で記述した点、私家集、歌合、定数歌などの古典和歌からの挙例が多い点、最新の古典文法研究の成果を取り入れその依拠文献を明示している点などが挙げられる。

内容は次のようである。「第1章 序論」, 「第2章 動詞」, 「第3章 述語の構造」, 「第4章 ヴォイス」, 「第5章 時間表現」, 「第6章 肯定・否定」, 「第7章 推定・推量」, 「第8章 当為・意志・勧誘・命令」, 「第9章 疑問表現」, 「第10章 形容詞と連用修

飾」,「第11章 名詞句」,「第12章 格」,「第13章 とりたて」,「第14章 複文」,「第15章 複合辞」,「第16章 引用・挿入」,「第17章 係り受け」,「第18章 敬語」,「第19章 談話」,「第20章 物語の文章」,「第21章 和歌の表現技法」。末尾に引用文献,用例出典一覧,あとがき,索引を付す。

(2015年4月30日発行 和泉書院刊 A5判横組み 752頁 8,000円+税 ISBN 978-4-7576-0731-6)